

## 仮説の検証

### 仮説

卒業後の学びや職業に関する目標が明確である生徒の方が、自己理解力や職業理解が高いだろう



17

## 仮説の検証

### 群分け

卒業後の進路目標の決定状況から4群に分けた

A群：決めていない

B群：進学か就職かを決めている

C群：どのような分野で学ぶ・働くかを決めている

D群：学ぶ学問・働く職を決めている

18

## 群ごとの職業理解力と自己理解力

表1 進路目標決定状況別の職業理解力・自己理解力

目標決定状況(人)	職業理解力		自己理解力	
	M	SD	M	SD
不明確 A (34)	19.09	4.84	30.18	7.30
B (53)	19.34	3.93	29.70	4.61
C (66)	22.41	3.65	34.20	6.05
明確 D (15)	24.47	3.81	32.87	6.31

19

## 仮説の検証

### 【1要因分散分析】

#### 職業理解力

$$F(3, 164) = 12.03, p < .001$$

#### 自己理解力

$$F(3, 164) = 6.78, p < .001$$



進路目標の決定状況の主効果が有意となった

⇒ 決定状況の明確さがA~D群の差に関係がある

20

## 職業理解力と自己理解力の傾向

### 職業理解力

【多重比較 (Holms法)】

D群 (進路目標が明確) > A群・B群

$$A: t(164) = 4.32, p < .001 \quad B: t(164) = 4.37, p < .001$$

C群 (進路目標がある程度明確) > A群・B群

$$A: t(164) = 3.92, p < .001 \quad B: t(164) = 4.15, p < .001$$

### 自己理解力

C群 (進路目標がある程度明確) > A群・B群

$$A: t(164) = 3.2, p = .002$$

$$B: t(164) = 4.1, p < .001$$

A群・B群の間、  
C群・D群の間には  
双方有意差なし

21

## 回帰分析結果

「進路目標の決定状況」を説明変数、

「職業理解力」「自己理解力」を目的変数として回帰分析

⇒ 「進路目標の決定状況」は「職業理解力」と「自己理解力」を有意に予測していた

$$\text{職業理解: } R^2 = .159, b = 1.93, SE = 0.35, t(166) = 5.6, p < .001$$

$$\text{自己理解: } R^2 = .066, b = 1.77, SE = 0.52, t(166) = 3.42, p = .001$$

22

## 自己理解力の傾向

【多重比較 (Holms法)】

C群 (進路目標がある程度明確) > A群・B群

$$A: t(164) = 3.2, p = .002$$

$$B: t(164) = 4.1, p < .001$$

A群・B群の間、  
C群・D群の間には  
有意差なし

D群 (進路目標が明確) は…?

23

## 群ごとの職業理解力と自己理解力

表1 進路目標決定状況別の職業理解力・自己理解力

目標決定状況(人)	職業理解力		自己理解力	
	M	SD	M	SD
不明確 A (34)	19.09	4.84	30.18	7.30
B (53)	19.34	3.93	29.70	4.61
C (66)	22.41	3.65	34.20	6.05
明確 D (15)	24.47	3.81	32.87	6.31

24